

論文

グローリア・ゴールドレイチの 『レアの旅路』 ——二大潮流の合体

佐川 和茂

キーワード

精神的な核
専門職
ボグロム
隙間産業
キブツ
対立軸

目次

はじめに
1 流浪と定住
2 奮闘と達成
3 ホロコーストの影
4 世代の交代
おわりに

はじめに

ソール・ベロー、バーナード・マラマッド、アイザック・バシェヴィス・シンガーを含むユダヤ系アメリカ作家の作品は、骨太の枠組みの中に、歴史や宗教や商法を含めた豊穡な内容を編み込んでいる。そうした特徴を、以下に論じてゆくグロリア・ゴールドレイチの『レアの旅路』(Leah's Journey) も十分に共有しているのである。『レアの旅路』は、閉塞状況にあり、「ユダヤ人の墓場」のように思える 20 世紀初頭のロシアから脱出し、イスラエルやアメリカへと向かう二大潮流を含む大河小説であると言えよう。

実際、その二大潮流は、作品の最後に至ると合体してゆくように見える。その合体の要因は以下のものである。アメリカで新たな生活を営むレアや夫デイヴィッドが、ハイファに建設中のレアの兄モシェたちの集団農場(キブツ)を訪れること、レアの娘リベカがネゲブ砂漠のキブツで働くこと、そしてレアがアラブ人の襲撃で倒れたデイヴィッドの墓参にハイファを訪れることである。

こうした合体は何を意味するのであろうか。

1 流浪と定住

その意味はまず、流浪と定住にかかわるものであろう。ただし、定住といっても、ここではイスラエルやアメリカに定住したという意味であるが、実際、モシェたちがキブツの建設を目指して動くように、また、レアたちがマンハッタンのレストラン・イーストサイドから、ブライトン・ビーチ、スカーズデイルへと移動してゆくように、イスラエルにせよ、アメリカにせよ、ユダヤ系の人々はしばしば住居を変えている。一般論としては、イスラエルを「約束の地」と見る場合、アメリカは流浪の対象となるわけであるが、いずれにせよ、主人公たちはロシア、イスラエル、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパとしばしば広範な移動を繰り返しているのである。この意味で、ユダヤ系の人々には、流浪の影響が抜きがたく残っていると言えよう。

では流浪の影響とは具体的に何を指すのであろうか。

歴史を振り返れば、紀元 70 年、第二神殿を破壊され、故国を失ったユダヤ人は、2 千年にも及ぶ流浪を余儀なくされた。その過程において、ある国に定住して繁栄を勝ち得たとしても、その国に何らかの問題が起これば、不条理にもその罪を着せられて追放され、また別の国に庇護を求めるという繰り返しであった。それは厳しい生活であったに相違ないが、半面、プラス面もなかったであろうか。すなわち、彼らは多文化や多言語に触れ、絶えず変化にさらされる中で、それを変革の機会とし、それを事業の発展へと変えてきたのではなかったか。彼らは逆境の中でも、マイナスをプラスへと転化し、状況の変革を目指してきたのである。これは流浪の影響であろう。

実際、ユダヤ人が長期に及んだ流浪の中で、滅びることもなく、マイナスをプラスへと変え、民族の核であるアイデンティティを守り、民族の団結を維持してきたことは驚異である。それは、彼らが精神的な核として聖書やその注解タルムードを携え、精神的な指導者ラビやシナゴグを活用し、相互援助制度を保持しえた成果であると見なせよう。

ちなみに、われわれ日本人が仮に流浪の境遇に陥った場合、果たして日本人としてのアイデンティ

ティを失わず、民族の結束を維持できるであろうか。

いっぽう、視点を変えれば、定住期間が長すぎる場合、そこに生じる閉塞感によって活気を奪われ、精神を侵されることが起こるかもしれない。例えば、レアの長男アーロンの妻カティの場合を見よう。彼女は、人種差別の激しいアメリカ南部に代々定住してきたユダヤ系家庭の娘であるが、そうした歴史の影響によってか、優れた弁護士であっても、精神が安定せず、アーロンとの結婚を円滑に営めず、交通事故の犠牲となってしまうのである。

2 奮闘と達成

二大潮流が合体することには、もう一つ、世代交代の意味も考えられようが、それは結論に回すことにしたい。ここでは、それぞれの潮流に沿ってユダヤ系の人々の奮闘や達成を眺め、三つの問いかけをしてみたい。すなわち、彼らの奮闘を動機づけているものは何か、差別や迫害の影響がいかに彼らに及んでいるのか、そして、その中で各人がいかに成長しているのか。

まず、彼らの奮闘と達成に関して、主な登場人物が従事してゆく職業に注目しよう。被服デザイナー、精神分析医、弁護士、工場経営者、キブツ創設者などであるが、それは長期の教育や高度の技術を要し、社会の尊敬を勝ちうる専門職なのである。

主な登場人物の中でレアと夫デイヴィッドは、旧世界ロシアの迫害を逃れ、マンハッタンのユダヤ移民集住地域ロウアー・イーストサイドに到着し、世界大恐慌のさなかに、レアはデザイナー、デイヴィッドは精神分析医を目指し、ともに生活の奮闘に明け暮れるのである。

実は、渡米以前、ロシアにおいてレアが最初に結婚して7ヶ月目に、20歳の夫ヤコフが頭を割られ、胸を刺されて殺された。そして、レア自身もロシア政府が扇動したユダヤ人迫害（ボグロム）において、夫と似た赤毛の暴漢にレイプされたのである。その後、レアは、兄モシェのアパートで千切れた夫のシャツを必死に修復しようと試みる。その行為は夫との生活を取り戻そうとするはかない試みに過ぎないが、それが渡米しファッション業界で活路を見出すことにつながってゆくのである。

ボグロムの後で妊娠したレアは、その父親が不明のまま、閉塞的なユダヤ人町（シュテトル）でともに育った年長者のデイヴィッドと一緒に、渡米する。デイヴィッドも近親者をボグロムで失っており、二人は互いに寂しさを紛らわすために「便宜的な結婚」に至ったのである。

その後、デイヴィッドはロウアー・イーストサイドの搾取工場（スウェット・ショップ）で日に14時間も働きながら、シティ・カレッジで学ぶが、それは容易なことではない。『貧しいユダヤ人とシティ・カレッジ』（*City College and the Jewish Poor*）によれば、「授業料が無料のシティ・カレッジが、移民教育への道となり、そこにロシア系学生が押し寄せた」（61）というが、デイヴィッドもその一人であった。ジェラルド・グリーンの『最後の怒れる男』（*The Last Angry Man*）と同様、デイヴィッドも苦学して医学校を目指すのである。ロシアで許嫁を殺された後、彼は、フロイト理論に惹かれ、人間の無意識や心の闇を探究し、暗黒に一条の光をともしようと願う。

疲労との戦いであるデイヴィッドの挑戦は、「紅海を分けるような」厳しいものであるが、それをレアの才能が助けるのである。レアはロウアー・イーストサイドのセトルメントハウスで学び、絵画

や被服デザイナーの才能を開花させてゆくが、それを用いて、旧世界ロシアで妻が働き夫の聖典学習を助けたように、新世界アメリカでもレアが働き夫の医学修得を援助するのである。寂しさを紛らわすために一緒になった二人であったが、レアが労働運動の闘士エリとロマンスに陥った時期があったにせよ、レアとデイヴィッドの関係は、望ましい夫婦愛へと発展してゆくのである。ロウアー・イーストサイドよりロシア系の多いブライトン・ビーチへ引っ越した後で、長男アーロン、長女リベカに続いて次男マイケルが生まれる。

ところで、ひと時レアと交わりを持ったエリは、旧世界において妊娠していた妻を殺され、世界の修復を願う。彼は、「たとえ全世界でなくても、周囲の悪を正そうと奮闘したのである」(393)。それは、労働環境が厳しい搾取工場に組合を結成し、雇用条件を改善しようとしたことであつた。結局、エリは、自らは工場火災で死ぬことになるが、最初の夫を殺され頑なになっていたレアを愛に目覚めさせ、デイヴィッドとの生活を継続するよう仕向けたのである。

ここで確認しておく、迫害を経てきたレアやデイヴィッド、そしてエリが奮闘する目的は、世の中の修復である。彼らは、「暗黒に一条の光をともしようとしてきたのである」(372)。そして、彼らの子孫もこの気持ちを受け継いでゆくのである。

それでは、デイヴィッドとレア夫妻の息子たちや娘の奮闘はどうであったか。

彼らの長男アーロンは赤毛であり、レアをレイプした男の髪の毛に似ていたため、彼の出生に関してレアは長く疑い、母子関係は長期にわたって不遇であった。その状況は、ヘンリー・ロスの『眠りと呼んで』(*Call It Sleep*)における両親と息子の関係をも連想させよう。その逆境は、ようやく13歳の成人式(バル・ミツヴァ)の折に、レアが変声期のアーロンに亡き夫ヤコフの声を聞いたことによって解消されてゆくのである。この後アーロンは、政治に関心を深め、ニューヨーク大学で学び、さらに、第二次大戦勃発時には選抜されて中東での特別訓練に加わり、砂漠のテントの中で、パレスチナに渡ったレアの兄モシェの息子ヤコフに奇しくも遭遇するのである。アーロンもヤコフもロシアでの迫害を逃れた「生存者の息子」として、存続のための戦いにはせ参じたのだ。その後、アーロンはイタリア軍との戦いで捕虜となり、やがて生還するが、「戦争や革命によってこの世の修復はできない」(306)と悟り、弁護士となって、(のちに悲劇を迎える)妻カティと共に、マッカーシズムと戦い、社会正義を求めてゆくのである。

また、彼の妹リベカは、17歳まで焦点の定まらない生活をしており、熱中しては中断するその性格は、彼女の机の上に反映されている。しかし、大戦勃発によって、ようやくその人生は方向性を獲得するのである。リベカは、パレスチナを統治していた英国の移民制限に抵抗し、アウシュヴィッツの生存者をパレスチナへ非合法で送り届けているイエフダ・アーノンに出会い、協力を要請されるが、その時点で、イエフダに関心を抱くのである。そして、イスラエル独立戦争の折に、リベカは看護婦として働くが、負傷者を乗せたまま放置されていた救急車の中にイエフダを見出すのである。二人は、つかの間の休戦時に結婚し、夫は独立戦争を生き延びてネゲブ砂漠にキブツ建設を始め、妻は難民を含めて3人の子どもを育てながら母レアと同じく絵画の修行も続けている。彼女の作品はパリやロンドンで展示され、やがてキブツも成功し、共同食堂や水泳プールも出来上がる。さらに、キブツ建設

の6年後に砂漠横断の高速道路が完成するが、それは紅海を分けた奇跡のようである。

いっぽう、レアとデイヴィッドの次男マイケルは、21歳になると、両親のように何か有益な仕事を見出し、暗黒に一条の光をともらせたいと願う。兄アーロンは、キブツで働くよう勧めるが、マイケルは、ハイファのテクニオン工科大学の仕事に関心を示してゆくのである。

こうして、キブツを中心としたハイテク農業や、ハイファを基盤としたハイテク産業というイスラエルの未来を築く産業に、リベカやマイケルは携わってゆくのであろう。そして、そのように発展してゆくイスラエルを、レアはデイヴィッドの墓参のために再訪することになる。

レアの子供たちに次いで、オデッサでレアと同級生であったサラ・エレンバーグの息子ヨシュアの奮闘を眺めてみよう。(エレンバーグ家は、レアたちの安アパートの間借り人であった。) 子供時代より商魂たくましいヨシュアは、19歳で株を売買し、その収益によって両親のためにスカースデイルに建てた家の借金を完済するという早熟ぶりである。彼は、周到に将来を計画しており、それを破壊しようとするナチスを憎む。

やがてヨシュアも参戦し、手榴弾で右手を失い、義手をつけて生還するが、そのときは看護婦であった小柄なシェリーが一緒である。やがてヨシュアは知人の出資によって起業するが、レアのデザインを活用して発展し、方々に工場を所有する企業家へと発展してゆくのである。

それでは、レアの姉マルチャと結婚したシモンの場合はどうであろうか。シモンは妻子を残して単身渡米し、裁断士として搾取工場で働くが、やがて小規模の商売を始め、自ら衣服を売りさばく。彼の営業は、レアのデザインによって潤い、大不況も終わりに近づく頃、既製の流行を見越し、彼は工場の拡大を狙っている。すると、レアは彼の会社拡大のために、新たなデザインを学びにナチスがはびこるヨーロッパへ行きたいという。普段から自己管理に配慮し、人生の優先事項を明確にしているレアは、決断と実践が素早いのである。レアはパリでココ・シャネルのファッション・ショーより多くを学び、結果として、彼女のデザインは次々と賞を取り、そのおかげでシモンの会社は国際的に大きく発展してゆくのである。

さて、これはダイヤモンド、映画、音楽、不動産、化粧品などの産業においても言えることであるが、被服やファッション産業においても、ユダヤ人はいわゆる「隙間産業」に入り込み、そこで成功すると、親戚や縁者を誘い、相互援助によって、成功をさらに大きなものにしてゆくのである。上記のヨシュアやシモンとレアの相互援助や発展ぶりにその具体例を見ることができよう。

いっぽう、アメリカではなく、パレスチナへ渡ったレアの兄はどうなったであろうか。

レアの兄モシェと、ユダヤ教ハシド派のラビの娘であった妻ヘニアは、オデッサのユダヤ人地区にあるアパートの暮らしを、パレスチナ渡航以前の一時的なものと見なしていた。二人は、パレスチナへ渡ると、テントで暮らし、荒地を開拓し、湿地やマラリアやアラブ人と戦ったのである。そこではヘニアでさえライフルを握った。

ちなみに、ボアズ・ニューマンの『土地と希望』(Land and Desire) にも見られるように、20世紀初頭に本格的なユダヤ人のパレスチナ移住が開始されたのである。ハルツィム(開拓者)には「前衛で戦う人」の意味があるが、その開拓には、軍事的・農事的な技術が含まれていた。当然、厳しい

環境にとどまる人々は、労働に耐えられ、意志の強固な者であった。実際、大地の現実は一層厳しく、去る者、自殺する人も出たのである。それでも、設立された「ユダヤ国庫基金」によってパレスチナの土地を買収し、1920年には定住地を守る自衛組織ハガナが生まれ、ヘブライ語の使用が優勢となってゆく。肉体労働への切り替えや、荒地やマラリアとの戦いに加えて、開拓者たちは新たな言語習得にも励んだのである。

そして、砂漠の治水によって耕作可能な土地が生み出され、そこに作られたキブツは、近代農法によって生産性を高め、さらに移民を受け入れる媒体となっていった。

まさに、開拓者の仕事は、血と汗と涙の結晶であった。開拓者たちは、心理的にも肉体的にも新たに生まれ変わることを望み、ヨーロッパのゲットーより出て、強靱な肉体を持つユダヤ人へと変身したのである。いわば、バーナード・マラマッドが『アシスタント』(*The Assistant*)で描いたモリス・ボーバーのような商店主や知識人が、逞しい農夫へと変わっていったのである。彼らが大地を開拓し、それを防衛することは、(ロシアでのボグロムの犠牲とは異なり)意味のある死につながるものであった。そこでは生命の鎖の輪につながることで、その意味が増していった。身体を鍛えるにつれて五感も研ぎ澄まされ、(ヘニアが変容したように)「片手にライフル、片手に鋤」という開拓者像が生み出されていった。

こうして、パレスチナの荒れ地を開拓しただけでも大きな修復であるが、彼らは、新しい農法や農機具を持ち込み、大地の価値を高めたのである。

このように見てくると、ユダヤ系の人々の奮闘と達成は大きなものであるが、彼らの力の源として以下のものが考えられるのではないか。すなわち、ユダヤ教のミッションとして、この世の修復があり、それがレアやデイヴィッドたちが暗黒に一条の光を求める奮闘へと繋がっているのである。彼らの人生はいずれも厳しいものであるが、その中で、彼らは多くの雑事を処理し、優先事項に関しては、日々たゆまず継続してゆく。そうした核として貫くものが、歴史の流れにおいて彼らを支え、彼らの人生を意義あらしめているのである。

さて、ここで比較として、山崎豊子の作品に言及しておきたい。彼女の諸作品は、戦争によって失われた世界を描き、豊かな職業を盛り込み、戦争を経た一途な人々の奮闘と達成を示し、戦後の立ち位置を確認しようとする点において、『レアの旅路』と響き合い、文学の豊かさを示しているのである。

たとえば、『レアの旅路』がヒトラーによって失われた世界を描いているように、山崎豊子の作品は戦災で焼けた大阪の船場を、『暖簾』『花のれん』『女系家族』『ぼんち』『しぶちん』に登場させ、そこでは失われた世界の言語イディッシュ語に対して、大阪弁を駆使しているのである。われわれは、そこに失われた生き方を見出し、こうした世界に惹かれるのである。

また、『レアの旅路』と同様、山崎豊子の諸作品においても、『不毛地帯』の商社、『白い巨塔』の医療、『女の勲章』のファッション、『運命の人』のジャーナリズム、『華麗なる一族』の金融、『仮装集団』の音楽など、職業の描写が豊富である。ここでは、いわばユダヤ商法と大阪商法が描かれているのであり、その迫力はわれわれを魅了する。

3 ホロコーストの影

『レアの旅路』には、二大潮流に沿ったユダヤ移民の奮闘と達成が十分に描きこまれている反面、差別と迫害の歴史、特にホロコーストの影響が主要人物たちに影を落としていることを指摘しておかねばならない。

たとえば、レアの娘リベカは、アウシュヴィッツを生き延びた子供たちをハイファに送り届ける事業に加わり、キブツでは彼らとともに暮らしてゆくのである。それは、17歳まで方向の定まらない生活をしてきた彼女にとって、いかに気持ちの引き締まる体験であろうか。

子供たちは、隠れていた地下の隙間より彼らの両親や兄弟姉妹が死に追いやられてゆく光景を目撃し、死と隣り合わせの収容所を生き延び、さらに難民キャンプを経ているのである。地下の隙間に潜んで生き延びた子供たちは、少しの物音や動きにも敏感であり、それが生死にかかわることを体得しているのだ。したがって、アウシュヴィッツの孤児たちは、トラウマに悩まされているはずであるが、少なくともそれを外見に示さず、驚くべき適応力を持って、キブツでの生活になじんでゆく。

ちなみに、逆境の中で子供たちが驚くべき成熟を示す例は、『レアの旅路』以外にも枚挙に暇がない。イェーギー・コジンスキーの『ペンキを塗られた鳥』(*The Painted Bird*)において迷信深いポーランドの人々にさまざまな虐待を受けた主人公の少年は、「雪の中に穴を掘って越冬する」ことを含め、存続の術に長けた人間へと変わってゆく。アイザック・バシェヴィス・シンガーの『愛の迷路』(*Enemies, A Love Story*)で、「収容所の子供たちは、一夜にして大人になった」(82)。そして、エリ・ヴィーゼルの『忘却』(*The Forgotten*)において、祖父母の安否を尋ねてゲットーに忍び込む15歳の少年は、「76歳の人間」よりも多くの体験を積むことになるのである。

また、『三十字広場のタバコ売り』(*The Cigarette Sellers of Three Crosses Square*)では、1942年、ワルシャワ・ゲットーより辛うじて脱出し、ゲットー崩壊後ドイツに占領された市内で、乞食をし、街角で歌い、雑用を引き受け、やがてタバコを売ってたくましく生き抜く少年たちが存在した。彼らのやりくり上手には感銘を覚えざるを得ない。後に彼らはイスラエルに移住し、中東戦争で戦うのである。

ところで、リベカは同胞のユダヤ人を救助したが、『レアの旅路』には、非ユダヤ人の救助者も描かれている。レアは、シモンの工場を拡大するために、ナチスがはびこるフランスに出かけて行くが、ココ・シャネルのファッション・ショーで出会ったドイツ人ハイネマンよりユダヤ人シュライバー夫妻の渡米援助を依頼されるのである。シュライバー夫妻は、一人息子を収容所に奪われ、財産を没収されていた。彼らを助けようとするドイツ人ハイネマンは、ナチスの政策に疑問を抱き、ユダヤ人の窮状に同情していたのである。ハイネマンは、エヴァ・フォーゲルマンが『良心と勇氣』(*Conscience and Courage*)で詳述し、『ホロコースト百科事典』(*Encyclopedia of the Holocaust*)が感謝をこめて取り上げている「異邦人の救助者」であるが、彼自身は収容所で命を絶たれてゆく。

いっぽう、レアや兄のモシェは、ロシアのユダヤ人村で暮らす老いた両親にパレスチナ渡航を勧めるが、両親は静かにそれを断る。彼らは、馴染の場所や宗教や慣習に囲まれ、余生を全うしようという。しかし、やがてレアのもとに、両親がほかのユダヤ人と共に「バビ・ヤールに連行された」(362)

という知らせが届く。描写はこれだけであるが、『ホロコースト百科事典』は言う、「キエフ北西部の峡谷で1941年9月29日より30日にかけて、33,771人のユダヤ人がドイツ軍によって虐殺された。それは、占拠されたキエフでサボタージュによってドイツ施設が爆破された報復としての蛮行であった」(134)と。後に、ホロコースト生存者でノーベル平和賞を受賞した作家エリ・ヴィーゼルは、この峡谷を訪ねようとしたが、ついに発見できなかったという(『一世代後に』 *One Generation After*)。両親を含めた多くのホロコーストの犠牲者の面影を抱き、生きる奮闘を続けてゆくレアの内面はどのようなものであろうか。

さて、兄のキブツへと向かうレアたちを運ぶタクシーの運転手は、ホロコースト生存者であるという(429)。これはさりげない描写であるが、たとえば、アート・スピーゲルマンの『マウス』(*Maus*)に描かれている生存者の父親像を眺めれば、この運転手の人間性がいかなるものであろうかと想像できるのである。

『マウス』の父親は、頑固で粘り強く、つらい仕事にも耐えられ、逆境にあっても容易にあきらめず、家族のために尽くした。驚くべき記憶力の持ち主であり、几帳面で倹約家であった。商才にもたけ、ホロコースト以後の人生において、かなりの資産を残したのである。

また、リベカに絵画の指導をしていたスティーヴンソン教授は、画家としての腕を買われ、新しい任務でベルゼン強制収容所に向かう。チフスが蔓延する収容所で骸骨のようになった抑留者の群れを見る。彼は収容所の光景をスケッチするのである。その収容所で大人たちは未来の希望である子供たちを守ろうとしたという。

『レアの旅路』では、ホロコーストのトラウマではなく、いかにホロコースト以後の生活を展開してゆくに描写の焦点が絞られている。その点は、ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』(*Man's Search for Meaning*)やソール・ベローの『ベラローザ・コネクション』(*The Bellarosa Connection*)の場合と同様である。『ベラローザ・コネクション』において、ホロコースト生存者であるフォンスティンは、少なくとも外面的には悲劇のトラウマを示しておらず、また、『夜と霧』においても極限状況におけるユーモアの効用とか、存続の奮闘に比重があると思える。

4 世代間の交代

『レアの旅路』において、両親の影響が次世代に及んでいることは明らかである。アーロンやリベカやマイケルは、暗黒に一条の光をともしようと奮闘する点で、両親の影響を受けている。子供は、受け継ぐにせよ、反発するにせよ、何らかの形で両親の影響を受け継いでゆく。両親の生き方がその子孫に及ぼす影響は、決して軽視できないものである。そこからいろいろな人生のドラマが展開してゆくのである。

彼らは、差別と迫害の歴史を経て、その中でこの世の修復を試み、有益な仕事に従事することを望み、暗黒に一条の光を求め、その奮闘の一部となるよう願う。「ユダヤ人として生まれたからには、聖書に何らかの新たな解釈を加えるよう求められる」(『ユダヤ教への誘い』 *The Complete Idiot's Guide to Understanding Judaism* 111)と同時に、神の戒律を生き、少しでも世の中の修復に携われ

るよう願う。

レアやリベカの絵画やデザイン、デイヴィッドの精神分析、シモンやヨシュアのファッション産業、アーロンやカティの弁護士業、モシェやイエフダやリベカたちの集団農場。それぞれが逆境の中で世の中を修復する媒体を創造した。それぞれが強みを発揮し、それを発展させることによって、独自の旅路を刻んだのである。各自がそれなりの分野で意味のある仕事を成し、その影響が何らかの形で次世代に及んでゆく。こうした世代の交代が繰り返される中で、長い歴史で眺めると、何らかの意味が築かれてゆき、そこに個人が生き死んでゆく意味が見いだされるのであろう。

山崎豊子が『作家の使命 私戦後』で述べる「生き残った者として、何をすべきかという思い」(50)が、レアたちの胸を離れないのである。

ユダヤ人は、厳しい歴史の中で存続を求め、変革を求めてきたのである。人は通常、尻に火が付いた状態にならないければ、なかなか重い腰を挙げないものであるが、幸か不幸か、ユダヤ人は常に尻に火が付いた状態で生きてきたのである。

レアは最終場面において、かつて住んでいたロシアの村落に戻り、若いころのようにそこで踊る。もはや村落はそこにはない。両親もそこにはいない。そこはホロコーストによって失われた世界である。レアの旅路は、一つのサイクルが終わったのである。彼女が若いころのように踊る姿には、サイクルが一巡したことを自らに確認する意味もあるのではないか。ただし、彼女の人生はまだ完全に終わったわけではない。ハイテク農業やハイテク産業など、発展を続けるイスラエルを眺めながら、彼女の旅路はまだ続いてゆく。

振り返ると、レアやその周辺の人々に絞った場合でも、これだけの奮闘をし、これだけの達成を成し遂げているのである。レアたちの場合に似たケースとして、ホロコースト生存者の子どもでもあるヘレン・エプスタインの家族を挙げることができよう。彼女は、『ホロコーストの子供たち』(*Children of the Holocaust*)を初めとして、彼女の両親の旅路をつづった作品を多く発表しているのである。彼女やその家族の活動を見ることによって、ユダヤ系アメリカ人の貢献を推し量ることができよう。

おわりに

ユダヤ系の経営学者ピーター・ドラッカーは言う、「持続と変容の間に流動的な均衡を求めることが、社会にせよ組織にせよ個人にせよ、存続を求めるに当たって重要である」(『アジアのドラッカー』*Drucker in Asia* 101)と。人は、古いものより学び、新しいものを付け加え、その折衷の中に未来を見出してゆく。

この態度は、ホロコースト文学研究にも当てはまるであろう。エリ・ヴィーゼルなどホロコーストの渦中にあった作家たちの作品を、それ以降に成長した作家たちの作品と読み比べ、その変容を探る姿勢が求められよう。さらに、新しい作家たちがその作品において何を言いたいのか、その技法はいかなるものか、現代や歴史的な状況をかながみてその作品の意義や位置付けは何か、を問うことには意味があろう。

さらに、新旧のホロコースト文学、流浪とイスラエル、女性と男性作家、映像と文学作品、ゲッター

と強制収容所、ホロコーストとそれ以降の修復の奮闘という対立軸にも配慮することが求められよう。

参照・引用文献

- Bellow, Saul. *The Bellarosa Connection*. Middlesex: Penguin Books, 1989.
- Blech, Benjamin. *The Complete Idiot's Guide to Understanding Judaism*. Indianapolis: Alpha Books, 2003.
- Cohen, Abraham. *Everyman's Talmud*. New York: Schocken Books, 1975.
- Diner, Hasia R. *Lower East Side Memories*. New Jersey: Princeton UP, 2000.
- Drucker, Peter & Isao Nakauchi. *Drucker on Asia: A Dialogue between Peter Drucker and Isao Nakauchi*. Oxford: Butterworth-Heinemann, 1997.
- Gorelick, Sherry. *City College and the Jewish Poor: Education in New York, 1880-1924*. New Brunswick: Rutgers UP, 1981.
- Green, Gerald. *The Last Angry Man*. London: Longman, Green & Co., 1957.
- Epstein, Helen. *Children of the Holocaust*. Middlesex: Penguin Books, 1979.
- Fogelman, Eva. *Conscience & Courage: Rescuers of Jews During the Holocaust*. New York: Anchor Books, 1994.
- Frankl, Viktor E. *Man's Search for Meaning*. New York: Pocket Books, 1959.
- Guttman, Israel. ed. *Encyclopedia of the Holocaust*. New York: Macmillan Publishing Company, 1990.
- Holy Bible*, The New King James Version. Nashville: Thomas Nelson, 1979.
- Kojinski, Jerzy. *The Painted Bird*. New York: The Modern Library, 1965.
- Lipman, Steve. *Laughter in Hell—The Use of Humor during the Holocaust*. New Jersey: Jason Aronson, 1991.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1957.
- Neumann, Boaz. *Land and Desire in Early Zionism*. Waltham: Brandeis UP, 2011.
- Roth, Henry. *Call It Sleep*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1991.
- Singer, Isaac Bashevis. *Enemies, A Love Story*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1972.
- Spiegelman, Art. *Maus. A Survivor's Tale*. New York: Pantheon Books, 1986.
- Wiesel, Eli. *One Generation After*. New York: Schocken Books, 1965.
- . *The Forgotten*. New York: Schocken Books, 1992.
- Ziemian, Joseph. *The Cigarette Sellers of Three Crosses Square*. Minneapolis: Lerner Publications Company, 1975.
- フロイト、シグモント『フロイト著作集2 夢判断』高橋義孝訳、人文書院、1969.
- 山口路子『ココ・シャネルという生き方』新人物文庫、2009.
- 山崎豊子『暖簾』新潮文庫、1957.
- 『花のれん』新潮文庫、1958.
- 『しぶちん』新潮文庫、1959.
- 『ぼんち』新潮文庫、1960.
- 『女の勲章』新潮文庫、1963.
- 『女系家族』新潮文庫、1963.
- 『花紋』新潮文庫、1964.
- 『仮装集団』新潮文庫、1967.
- 『白い巨塔』新潮文庫、1969.
- 『華麗なる一族』新潮文庫、1973.
- 『不毛地帯』新潮文庫、1978.
- 『作家の使命 私の戦後』新潮文庫、2009.